

茅ヶ崎市立第一中学校

研究テーマ：すべての生徒が共に学び、共に育つ学校を目指して

1 実践の目的

本校は、平成27年度から30年度までの4年間、神奈川県教育委員会より「みんなの教室」モデル校の指定を受け、インクルーシブ教育の推進＝ユニバーサルデザインの視点を意識した授業づくりに取り組んできた。その背景を生かし、本校ではインクルーシブを意識した授業改善を継続してきた。

今までのインクルーシブの視点を意識した授業づくりを整理するとともに、学校の支援体制を整え、すべての生徒が共に学び、共に育つことのできる学校を目指したいという思いでテーマを設定した。

2 実践の内容

(1)「共に学び、共に育つ」ための手立て
一中の約束(教室前面はスッキリと・授業開始時にタイムタイマーをセット・「授業の流れ」と「めあて」を提示し活動の終了時刻を明示)を土台とし、昨年度から取り組んでいる、「共に学び、共に育つ」ための手立てを取り入れた授業づくりを実践した。

手立ては大きく2つに分類される。1つ目は、「学び方を選択できる場面」である。すべての生徒が、自ら学びやすい授業を設計するために、難易度別の学習課題やコース別学習、ワークシートの種類(紙 or デジタル)など、選択できる場면을授業に設定した。2つ目は、「協働的な学びの場面」である。授業の中で、お互いの考えを伝え合い、整理しながら課題を解決していく経験を積み重ねることで、多様性を認め合い、他者を

尊重する心が醸成され、生徒に根付いていくと考えた。

(2) 全職員参加型の指導案検討会

研究授業を年間4回行った。その際の指導案検討は全職員がグループに分かれ教科問わず参加する方法で取り組んだ。

(3) 「生徒の姿」から迫る授業検討会

研究授業後に行われる授業検討会において、中学校では自身の担当教科と違う教科の場合は発言が少なくなったり、「教科が違うので分からないのですが…」といった発言が出てきてしまったりする傾向がある。また、一般的に「学習者がどのように学んでいたか？」に関する議論より、授業者の提示する教材や、教授法についての議論が多くなりやすいとの指摘もされている。これらのことから、授業参観時には、「生徒の姿」を中心に授業を捉え、授業検討会では、授業の中での生徒の様子を中心としたやりとりが行われることを目指し、取り組んだ。

(4) 三校合同の研修会

かながわ学びづくり実践研究推進校として、同学区の茅ヶ崎小学校と東海岸小学校の先生方も参加する合同の形で講演会を開催した。講師の先生には、三校の研究テーマの土台となる「子どもの自尊感情をどう育てるか」についてご講演していただいた。

(5) 「一中版 支援シート」づくり

授業研究を進めていく上で、全職員が同じ視点で生徒の困り感をつかみ、支援していく重要性を感じた。そのため、年度当初に支援のためのチェックリスト(一中版支援

シート)を教職員全員で作成し、同一の視点で経験年数や学年を問わず、自分の意見を語りやすくできるようにした。また、チェックリストを基に、具体的な支援策を含む支援計画を立て、生徒支援の視点を中心に授業研究に取り組んだ。

一中版 支援シート

氏名(ふりがな)		年度	クラス	担任名	
	令和	年度	年 組		
気になるところ・支援が必要とところチェックリスト					
話し・聞き・読み・書き・計算・推論	No.	内容			チェック
	1.	行動をやめて話を聞くことができない。			
	2.	聞き間違いがある。「知った」を「行った」と聞き違えるなど。			
	3.	聞いた内容を覚えることが難しい。 (例:先生の言ったことをもう一度言ってごらんと聞いて復唱できない。)			
	4.	個別に言われたと聞き取れるが、集団場面だと難しい。			
	5.	聞いた内容の理解が難しい。(書けない、表現できない、生かさないなど。)			
	6.	学習全体の前で、発表することが難しい。(例:スピーチなど。)			
	7.	グループ(3人以上)での話し合いなどで発言することが難しい。 (例:分からないなどの意思表示もできない。話し合いの流れについていけない。)			
	8.	ペア学習でのやりとりが難しい。			
	9.	適切な速さで話すことが難しい。(ただどしどし話す、とても早口であるなど。)			
	10.	考えを話すとき、言葉をすぐに思い出せず、言葉につまる。			
	11.	語彙が乏しく、表現の仕方が分からない。 (単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をする。)			
	12.	思いつづまに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい。			
	13.	内容を分かりやすく伝えることが難しい。			
	14.	初めて出てきた語や、普段あまり使わない語等を読み間違える。			
	15.	文中の語句や行を抜かしたり、繰り返して読んでしまう。			
	16.	音読が難しい。			
	17.	読み間違いがある。(例:「い」を「は」と読む。)			
	18.	文章の要点を正しく読み取ることが難しい。			
	19.	書字に課題あり(字の形や大きさが整っていない又はまっすぐに書けない。 独特の筆順、漢字の細か・部分の書き間違え、アルファベットなどの書き間違えなど。)			
	20.	書くスピードが調整できない。(黒板の字を写すのに時間がかるなど。)			
	21.	句読点を抜いたり、打ち間違えたりする。			
	22.	限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書けない。			
	23.	計算に時間がかかる。(簡単な計算が暗算出来ない。)			
	24.	いくつかの手続きを要する問題を解くことが難しい。(四則混合の計算、方程式など。)			
	25.	見取り図や展開図の理解が難しい。			
26.	量を比較することや、量を表す単位を理解することが難しい。 (長さやかさの比較「15cmは150mm」ということなど。)				
不注意・多動・衝動	27.	学習で、細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしりする。			
	28.	学習や遊びの集中に注意を継続することが難しい。			
	29.	指示に従えず、最後までやり遂げることが難しい。			
	30.	学習や活動を順序立てて行うことが難しい。			
	31.	学習や活動に必要な物をなくしてしまう。			
	32.	手足を思わず動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。			
	33.	着席しているべき時に席を離れてしまう。			
	34.	授業中、発言のルールを守らず、思いいついたときに発言する。			
	35.	他人がしていることをささきつたり、邪魔したりする。			
	36.	知識や興味に偏りがある (特定の教科のみ点数が高い・低い、興味のあることに関する知識が豊富など)。			
社会性	37.	いろいろなことを話すが、その時の場面、相手の感情、立場を理解することが難しい。			
	38.	会話の仕方が形式的であり、抑揚がなく話したり、問合いが取れなかったりする。			
	39.	友達と仲良くしたい気持ちはあるが、友達関係をうまく築けない。			
	40.	自分なりに独特な日課や手帳があり、変更や変化を嫌がる。 (急な時間制変更などを嫌がるなど)。			
	41.	相手の言うことを言葉通りに受け止めてしまうなど。 前後の状況から意味を想像することが難しい。			
	42.	友達とのそばにいるが、一人で過ごす。			
	43.	仲が良い友達がおらず、移動教室など一人で移動する。			
	44.	保護者経由の提出物の提出が難しい、提出率が低い。(面談の希望など)。			
規範意識	45.	欠席が多い。			
	46.	遅刻が多い。			
	47.	授業中、やる気を示さず、机に伏せたり、教科書やノートを開こうとしない。			
	48.	授業中、私語が多い。			
	49.	注意されたことを改善しようとしていない。			
	50.	机上・机の中・ロッカーなど整理整頓ができない。			

チェック数

話し・聞く	読み・書き	計算・推論	不注意・多動・衝動	コミュニケーション・社会性	日常・学習意欲・規範意識
14	8	4	9	8	7

3 実践の成果

「共に学び、共に育つ」ための手立てを意識した授業づくりに学校全体で取り組むことができた。また、指導案検討会を、教科問わず全職員が参加する形にしたことで、様々な教科で行われている手立ての共有が図られたり、生徒情報の共有がスムーズに行われたりした。学校全体で共通認識のもとに取り組み、共有することで実践力を高めることができた。

今年度の研究実践により、誰でも取り入れることのできる手立てや、教科の特性によるアイディアなど、多くの発見があった。また、授業検討会も、生徒の姿から語り合う検討会に変化させることができた。

研究を通して、これまで以上に、生徒の良いところを認める姿勢が全職員で高まったと考える。生徒アンケートにおいても、「先生方は、あなたが良いことをしたときや努力したときに認めてくれますか。」という項目において96.2%の生徒が肯定的にとらえていることが分かった。

4 今後の展開

成果を多くあげられた一方で、研究を進めるにあたり様々な取り組みを行ったため、負担感の部分で課題が残った。一中版支援シートを作成する場面や、定期的な支援の見直しにかかる時間の確保などが難しかった。今後も「すべての生徒が共に学び、共に育つ」学校を推進していくにあたって、学校全体で研究方法を取捨選択し、力を入れるべき部分に焦点を絞って、継続可能で効果的な支援体制を整えていきたい。